



六日目追加 HO
マリー





スマレに痣を見られてしまった。

私は魔女になるために生まれてきたのに、彼に知られて動揺していた。

その動揺から逃げるように、^{うわ} ^が上掛けを頭からかぶる。

どのみち、明日にはスマレに話さなければいけなかったのだ。

それが早まっただけ、そう思い直して、目を閉じた。

夢をみた。

真っ暗な空間の中、一人で走っている夢。

なにかに追われているような感覚があって。

暗い、こわい、おそろしい。

逃げたい、逃げたい。

息が詰まりそうだった。

足を止めたら暗闇に飲まれてしまいそうで、止められない。

どうすればいいんだろう。

このままずっと独りで走り続けないといけないの？

そう思ったときだった。

「マリー」

私の名前を呼ぶ小さな小さな光が見える。

そこに向かって走り続けて——光に触れたとき、目を覚ました。

まだ日が昇る前のようだ。





ロフトの小さな窓から外を見ると、スマレがまだ作業をしている。

あの声は……？

昨日の夢ではしっかり聞こえたのに、今日の夢では霞がかったような声だった。

なぜだかスマレの背中から目が離せない。

けれど、彼が急にこちらを向いて、びっくりして身を潜めた。

気づかれてないかな。

それからやる心臓を抑えて、少女の日記を開いた。

『六日目。今日も夢見が悪かった。魔力が体になじんでる影響なのだろうか、なぜだか、こわくて逃げ出したい気持ちになる。かつての少女たちが感じた気持ちなのかもしれない』



五日目とは打って変わって、きれいな字で書かれている。私も夢の中で、こわくて逃げ出したい気持ちになっていたことを思い出す。

少女の日記は、六日目で終わっていた。

私は魔法を解くための本がないか、読書を再開した。次から次へと本を積み、やっと、その本に出会えた。

薄くて小さな本にはただ、こう書いてあった。





『人にかけられた魔法は、解くことができる。ただし、相応の代償を支払うことになるだろう』。

やっぱり魔法は解くことができる——、けれど、相応の代償とは一体どんなものだろうか。

ページをめくってもあとは白紙で、それ以上の情報はなかった。

魔女になれば魔法を授かり、長い時を生きることになる。

そして、スミレの魔法も解くことができる。

けれども、それには代償が伴うようだ。

それもどんなものかはわからない。

本来なら一人で過ごすはずのこの小屋に、スミレがいてくれてよかったと思う。

土砂崩れが起きた夜も、そのあとも、助けてもらってばかりだった。

今日見た夢だって、スミレのおかげで光を見つけられたのかもしれない。

そうでなければ、私はずっと独りで走り続けていただろう。

今日は私が小屋にやってきて七日目。

昼には司祭がやってきて魔女になるための儀式が始まるはずだ。

このまま儀式を受けるか、逃げてしまうか。

私は——。





選択肢

1.魔女になる

2.魔女にならない

